

2 県下各地の取り組み

1 野菜の生産動向

兵庫県の野菜生産は、1999年12,251haで近年減少傾向にある。一方施設野菜は増加しており879haで、コマツナ、シュンギクなどを主体とした軟弱野菜生産へ大きくシフトしている。

また最近の消費者の野菜購入時の留意点は「鮮度や品いたみの程度」が最も多く、また購入の際の傾向としては、「栄養のバランスを考えて」「旬のもの」「国産、地元産のものを選ぶ」となっている。こうした消費者ニーズに応え、地域の特性を生かした野菜生産が県下各地で取り組まれている。

2 環境保全に配慮した「こうべ旬菜」

神戸市西区の施設野菜は、県下でそのウェイトが最も高い地域である。神戸市野菜契約栽培事業のなかで1995年度より有機栽培、減農薬栽培などに積極的に取り組み、1998年度から新たに神戸ブランド野菜育成推進事業、愛称「こうべ旬菜」を展開している。キャベツ、コマツナ、ナスを中心に、生産者延べ約950人、出荷量は約6,500tである。

3 レンタルハウスでの産地育成

1989年頃から、レンタルハウス制度を活用した新たな産地育成が県下各地域で行われている。

そのなかで産地規模が大きいのは、養父郡大屋町のおおや高原有機野菜部会で、ハウレンソウを主体に、現在は9戸、ハウス面積56,000㎡、出荷量198t、販売金額14,000万円となっている。

4 特産物での産地拡大

(1) 岩津ねぎ

岩津ねぎは、朝来郡朝来町岩津地区を中心に栽培される根深ネギで、全国的にも珍しい葉部と軟白部ともに食べることができ、軟らかく、美味で、高級感のあるネギである。かつては20ha以上の栽培面積があったが、1987年頃には2ha程度まで減少した。そこで、平成に入り「1町1品1億円」の目標

のもとに栽培技術改善や新たな販路開拓を行った結果、岩津ねぎのブランドが認知され、1999年には12.5ha、販売金額1億円以上となっている。

(2) 初夏どりキャベツ

初夏どりキャベツは、城崎郡日高町の神鍋高原で、1947年頃、ダイコンの連作障害対策の転換作物として導入されたのが始まりとされている。現在、約40ha程度栽培されている。準高冷地という気象条件を生かし、市場の品薄期である6～7月を中心に出荷され、高い評価を得ている。また兵庫みかた農協管内では、1993年から初夏どりキャベツの産地化を推進し、17haの面積となっている。減農薬・無化学肥料栽培による「たじま雪ん娘育ちキャベツ」のブランド化にも努めている。

(3) 新たな特産へ「丹波ひかみねぎ」

氷上郡市島町で、1996年に転作作物として「下仁田ねぎ」に着目し、試験栽培に取り組み、「丹波ひかみねぎ」として直売や市場出荷で好評を得た。

その後京都市場や生協等への販路拡大に努力し、昨年の栽培は、ほぼ郡内一円の115名、8.7haに拡大した。今後は品質の向上や産地規模の拡大を図り、特産物としての産地化が期待される。

(4) 淡路たまねぎ

淡路地域は県下の野菜粗生産額の44%を占め、その主体品目は、タマネギ、レタスなどで、全国有数の野菜産地でもある。なかでもタマネギは1886年に試作が始まり、1964年には3,000ha近くに達し、柔らかくて、甘い「淡路たまねぎ」としてブランドが定着している。近年、栽培面積の減少に歯止めをかけ、輸入や産地間競争に打ち勝つため淡路型タマネギ収穫機や移植機の開発普及が急ピッチで進められている。また、大型産地として「安全・安心・安定」を目指した取組が行われている。

小松 正紀 (中央農技・普及指導室)